

《特集》岩下壮一研究②

岩下壮一留学交遊録(1)

加藤和哉

岩下壮一(1889-1940)は、1919年(大正8)年8月に文部省の派遣により¹⁾、哲学研究を目的として二カ年の予定で英国並びにフランスに向けて出発した²⁾。しかし、留学中にカトリック司祭となる道を選択し、神学校に入り、最終的に1925(大正14)年6月にヴェネチアで司祭に叙階されて、同年末に帰国した。

この約六年半にわたる留学時代のうち、1921年10月初めから1923年末までの約二年の中断³⁾をはさみ、四年余りの日記(以下「留学日記」と記す)が三冊の日記帳に残されている。三冊の日記帳に記されている期間を示すと以下のとおりである。

○第一冊(1919年8月24日～1921年10月3日)

○第二冊(1924年1月1日～12月31日)

○第三冊(1925年1月1日～12月初旬)

¹⁾ 岩下は、身分の上では文部省の派遣留学生として公用の旅券を与えられていた(岩下壮一「導かるゝまいに」『声』533号、1920年4月、p.84)。ただし、官費の給付を受けることによって帰国後に拘束されることを嫌って、私費留学を選んだとされる(小林珍雄『岩下神父の生涯』(以下『岩下神父の生涯』)中央出版社1961年、pp.80-82参照)。1925年の日記の末尾には、「文部省返金 2600」との記載がある。

²⁾ 大正8年8月13日付の文部省からの派遣命令には、「哲学研究ノ為満式箇年間英国仏国へ留学を命ず」と記されている(『岩下神父の生涯』、pp.81-82)。また同年七月に東京府に出された旅券下付願では、旅行地としてフランス、イギリス、ベルギー、スイス、イタリアが挙げられている。

³⁾ 空白の時期にそもそも日記が書かれなかったのか、書かれたものの何らかの理由で破棄されたのかは不明である。1921年10月初めは、岩下がロンドンでセント・エドモンド・カレッジに入学して、神学生として歩み始めた時期である。一冊目の日記帳には多くの空白ページが残されていることから、意図的に中断されたことがうかがわれる。

第一冊は市販の携行用旅行日記⁴⁾に記されており、旅行、移動、イベント、訪問などの記録が中心で、特にヨーロッパ到着後は、日々の生活については触れられていない場合も多い。また、その記述も毎日書いているというより、何日か分をまとめて記入していると見られる。前半は、裾野の実家を旅立つところから始まり、上海、香港、シンガポール、ベナン、コロボなどを経由し、スエズ運河を通して地中海に至り、同年10月14日にマルセイユに到着するまでの間、ほぼ毎日記された航海の記録である。その後はパリ、ルーヴァン、ロンドンなどでの遊学や人との交遊、イギリス、フランス国内の旅行の様子などが記されるが、空白の時期も多い。

第二冊と第三冊は、いずれもイタリア語の日付入りのダイアリー（1924年版・1925年版。各ページ上下二段で二日分）に書かれており、ほぼ毎日記されている。

第二冊（1924年）には、ローマおよびヴェネチアでの神学生としての生活が記されている。6月にローマでの神学の課程を終えて、ヴェネチアに移り、以後翌年の司祭叙階に向けた準備を始めている。ただし、10月からは年末からヴァチカンで開催予定の万国布教博覧会⁵⁾の日本側委員に任命され、以後、ローマとヴェネチアを行き来する生活を送っている。

第三冊（1925年）には、引き続き四月末までローマで博覧会の準備に携わった後、ヴェネチ

⁴⁾ 明治44年（1911年）11月10日、神田錦町一丁目文運堂発行。定価二十五銭。冒頭には旅行の心得などが記載され、見開き二頁で一日分の形式で、日々の記録を記す欄のほか、日程、天候、発着地、経路、交通機関、応接と通信、食事、金銭出納などの記録の欄が設けられている。ただし、岩下がこの形式に従って記入したのは当初の数日のみで、そのあとは一日分の見開き二頁に、数日分の日記を記しており、各記載欄も無視している場合が多い。

⁵⁾ 1925年の「聖年」に合わせて、1924年12月21日から1926年1月10日までヴァチカンで開催された博覧会。主にアジア、アフリカ、オセアニアなどの布教地から文化的・民俗学的な資料が集められた。日本に対しても、ローマ教皇片使節ジャルディーニより文部省に要請があり、宗教局がこれに応じ、数百点が出品された。キリスト教伝来時代の文物などキリスト教に関係のあるものだけでなく、仏教の経典や仏像や僧服、日本人形のほか、皇太子の伊勢神宮参拝の様子を収めたフィルム、ハンセン病を含む日本の医療の状況を示す資料、前年の関東大震災の被害と復興状況の写真などが含まれていた（『朝日新聞』1924年8月29日朝刊、10月5日朝刊、12月2日朝刊）。なお、この時に集められた物品の多くは、その後作られたヴァチカンの民族博物館に収められた。Cf. Erick Cakpo, *L'Exposition missionnaire de 1925, Une affirmation de la puissance de l'Église catholique*, *Revue des sciences religieuses* 87 n° 1(2013), pp.41-59; Angelyn Dries, *The 1925 Vatican Mission Exposition and the Interface Between Catholic Mission Theory and World Religions*, *International Bulletin of Mission Research*, Vol.40(2), 2016, pp.119-132.

アに戻って6月6日に叙階式を迎える様子が記されている。その後はヨーロッパ各地の旅行とアメリカ経由の帰路の記録である。6月末にヴェネチアを発ち、フリブール、インスブルックを経由して、ドイツに入り、ミュンヘンなどを訪れ、オランダのファルケンブルク (Valkenburg aan de Geul) にあったイエズス会の神学校⁶⁾を訪問している。その後イギリスに渡り、ニューマンが創設したパーミンガムのオラトリオに二十日ほど滞在した後、ヨークまで足を伸ばし、オックスフォードでは国際カトリック連盟⁷⁾の大会に出席、その後ロンドンで一週間ほど過ごしている。そこからフランスに戻り、パリ、リジュール、ポルドーを訪れている。さらにスペインに向かい、サンセバスティアン、ロヨラ、ハビエル城、バヤドリッド、マドリッド、バルセロナに立ち寄っている。その後フランス南岸を経由して、イタリアに入り、9月11日にヴェネチアに戻っている。9月18日にはヴェネチアを離れ、フィレンツェを経由してローマへ向かい、帰国の手続きや準備をしている。11月6日にナポリから米国に向けて出航し、20日にニューヨークに到着。フィラデルフィア、ワシントン、ラトロベ、バッファローを訪れ、ナイアガラ滝の周遊をしている。さらにシカゴを経由して、12月4日にミネアポリス・セントポールを離れたところで、記述はほぼ終わっている(日本に帰着したのは12月24日であったとされるが、それまでの約二十日間は若干のメモ書きがあるのみである)。

中でも注目すべきは、叙階後に帰国するまでの間、ヨーロッパ全土とアメリカ各地を訪問していることである。これは決して、帰国前にただ観光旅行をして歩いたということではない。

⁶⁾ プロイセン王国の「文化闘争 (Kulturkampf)」によってラインラントの修道院の閉鎖を余儀なくされたイエズス会が設立した北ドイツ管区の神学校。Cf. *25 Jahre Ignatiuskolleg Valkenburg 1894-1919*, Fribourg 1919. ナチスに抵抗したことで知られる Rupert Mayer、第二ヴァチカン公会議において主導的な役割を果たした神学者 Karl Rahner、のちに来日する Hugo Lassalle, Bruno Bitter, Pedro Arrupe ら、日本人では広島教区長などを務めた荻原晃、六甲学院の初代校長竹宮隼人などが学んでいる。

⁷⁾ 国際カトリック連盟 I.K.A (International Catholic League 略号はエスベラントによる) は、第一次世界大戦後に、カトリックの平和運動を意図して組織されたものである。1925年8月10-15日に、Oxford の Wadham College を主会場に大会が開かれていた。日本からは正式の代表団が出ておらず、岩下はオブザーバー参加だったと思われる。Cf. Stephen J. Brown, *Chronicle, Catholic Internationalism, Studies: An Irish Quarterly Review*, Vol. 14, No. 55 (Sep., 1925), pp. 476-479; *Chronicle, The Oxford Conference for Catholic Action, The Catholic Historical Review*, Oct., 1925, Vol. 11, No. 3 (Oct., 1925), pp. 452-504.

敬愛する聖なる人々にゆかりの聖地——バーミンガム（ニューマン）、リジュー（幼きイエズスのテレジア）、ハビエル城（フランシスコ・ザビエル）、ポルドー（マリア会創設者シャミナード）など——を巡礼し、またこれまで知己を得た司祭・修道者（マリア会、パリ外国宣教会、イエズス会、オラトリオ会、ロレット会、マリー・レパラトリス会など）を訪れているだけでなく、カトリック系の出版社や新聞社、学生団体なども訪問している。

これらの訪問先からは、いわば現代のフランシスコ・ザビエルとして「日本宣教」を志した岩下——岩下の洗礼名は「フランシスコ・ザビエル」であり、彼が司祭に叙階されたのもザビエルと同じヴェネチアであった——が、そのために必要と思われる人間関係を築き、情報収集を行ったことがうかがわれる。本稿は、「留学日記」に登場する人物との交遊を通して、岩下が築いた^{スピリチュアル}霊的ネットワークを明らかにしようとするものである。

「留学日記」に登場する人名は、日本人名と思われるものが約100名、外国人名と思われるものが約300名に達する。ただし、日本人名でも姓のみが記された場合も多く、特定することは簡単ではない。本研究では、同時代の文献資料などによってできる限り特定を試みた。さらに困難を極めるのが外国人名である。岩下の筆記体文字の読み取りの困難に加えて、これも姓や名だけの表記がある。さらに外国人名がカタカナ表記されている場合には、原語表記をつきとめることも容易ではない。ここでも様々な資料にあたり、個人の特定を進めた。他の資料などから客観的にみて確実と思われる場合もあるが、推測の域にとどまる場合もある。おそらく、今後の研究の進展や筆者の未見の他の資料から誤りが判明する場合もあると考えるが、研究諸氏による検証と批判を仰ぐためにも、あえて不確実なものも拾い上げた。また、人名以外にも、出版社や団体名など岩下の関心に触れるものも取り上げた。

（1）日本人交遊録

①家族・親族

「留学日記」には、書簡の往来信の相手として、父岩下清周（1857-1928）、母幽香子（1866-、妹、花子（1891-1984）とその夫岩倉具光（1886-1960）、同じく妹、雅子（1892-1927）とその夫

山本三郎(1884-1932)などが記されている。山本三郎は、暁星中学校時代に岩下の洗礼の代父ともなった親友であり、手紙のやり取りも相当数に及んでいる。

さらに聖心会の会員であった妹、**岩下亀代子**(1894-1984)とは、手紙だけでなく実際に会っている。亀代子は1916年に渡英して、ロンドン大学に入学した後、1918年1月2日に聖心会に入会し修練者となっていた。岩下は、到着直後の1919年11月3日に、ローハンプトン〔Roehampton〕の聖心会修道院にいた亀代子のもとを訪れ、再会を果たしている。その日の「留学日記」には「ローハンプトンに電話をかけ午後三時にゆく約束をする、日本領事館に visa を貰ひにゆき、City の雑査中に中食し郵船會社によりフエンチャーチ〔Fenchurch〕停車場よりタクシーをやとひ(三 磅^{〔ポンド〕}!)ローハンプトンに三時につき五年目で妹に會ふ、一時間の會談夢の如く忤悲交々至る、明日手術をするから會へぬと云ふ、名残をしいが四時半すぎかへる」と記されており、この邂逅は、翌年に書かれた手記「導かるゝまゝに」の中でも触れられている⁸⁾。その後、亀代子は1920年8月15日にローハンプトンで初誓願を立て、岩下もこれに列席したことを日記に簡潔に記している(「八月十五日ローハンプトンにて誓願式」)。また、1924年12月2日の日記には「亀代子(西、仏、英、伊、約百枚づゝ送る)」との記載がある。これは、山本信次郎が始め、岩下が継承した「暁の星の祈祷会」の事業(後述)で、その祈禱文を印刷した御絵の各国語版を送付したものと考えられる(亀代子を通じて、各国の聖心会などに配布されたか)。1925年8月22日にはロンドンのハマースミス〔Hammersmith〕修道院に妹を訪ね、10月25日と29日にはローマで会っているほか、帰国のためにローマを離れる前日11月1日も聖心会の本部で面会している(このとき、亀代子は、翌年2月12日に行われることになる終生誓願の準備のためにローマに滞在していたと考えられる)。彼女は、1926年に帰国し、兵庫の小林聖心女子学院、東京の聖心女子学院(三光町)、聖心女子高等専門学校、聖心女子大学などで教えた。

⁸⁾ 岩下壯一「導かるゝまゝに」『声』535号、1920年6月、pp.35-36(拙稿「岩下壯一研究①「導かるゝまゝに」「聖心の村パレー・ル・モニアルより」『宗教と文化』39号、2023年3月、pp.29-30参照)。

②友人

「留学日記」には、暁星中学校、第一高等学校、東京帝国大学時代の友人、あるいは公教青年会を通じて知り合った友人・知人が数多く登場する。日記に名前が登場する回数が多いのは、戸塚文卿、小倉信太郎、渋谷治、五百旗頭眞治郎、久保勉である。

戸塚文卿（1892-1939）は⁹⁾、1904年暁星中学校に入学、四学年上に岩下がいた（旧制中学校は五年制）。当初はカトリックに関心を示さなかったとされるが、やがて公教要理を学ぶようになり、1909年第一高等学校入学直後にカトリック麻布教会の主任司祭ツルペン¹⁰⁾から受洗した。一高在学中には、岩下が1906年に創設したカトリック研究会に毎週出席したとされる¹¹⁾。翌年には、岩下、戸塚に加えて同じく暁星中学校出身の渋谷治（後述）が社会事業への貢献をめざして、日本最初の「聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ会」¹²⁾を創設した。これが基盤となって1916

⁹⁾ 戸塚の経歴については、小田部胤明『戸塚神父伝 神に聴診器をあてた人』（以下『戸塚神父伝』中央出版社、1979年を参照。

¹⁰⁾ エルネス・オーギュスタン・ツルペン（Ernest Augustin Tulpin 1953-1933）。パリ外国宣教会司祭。1877年来日。1877年から1932年まで麻布教会主任司祭。

¹¹⁾ 『戸塚神父伝』p.48参照。この研究会は、岩下が、暁星中学校の恩師で帝大のフランス語講師でもあったマリア会士エミール・エック（Emile Heck, 1868-1943）に依頼して創設したものである。エックは以下のように記している。「一高に入学して数週間たつた或日の午後三時頃、私が講義を終へ、カバンを抱へて赤門を出ようとしてゐる時、岩下師が心配さうな顔をして近づき、『先生、唯今一高には暁星出身のカトリック信者が六名のみです。所が私共の信仰を守るためには、どうしても深い宗教研究が必要なんです。毎週一回でもよろしいですから、先生のところで、学問的なカトリック研究を続けさせていただけませんか。一高の先生方の講義を伺つてみますと、いろんな疑惑が生じますので、その解決を求めたいと思ふんです。先生は大変いそがしいんでせうから、前もつて題目を定めていただき、それについて私共が交りばんこに研究発表を行ひませう。先生はたゞ御指導くださるだけで結構です。暁星時代に教つた公教要理ではもう間に合わないんです。』と真剣にカトリック研究会開催を申し出てきた。…中略…その頃私は東大と暁星とに職を奉じ、多忙を極めてみたのであるが、暁星出身の一高生諸君が、岩下師を通じてなした道理ある願ひをむげに断ることができなかつた。かうして私共の小さな研究会は誕生したのであつた。研究会員諸君は皆フランス語が達者だつたので、一同資金を持ち寄つて、仏書のカトリック文庫をこしらへ、之によつて研究を深めて行つたものである。」（エミール・エック「教へ子フランソア・ソイチ」『声』780号（1941年2月）、pp.25-26）

¹²⁾ 聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ会は、アントワーヌ＝フレデリック・オザナム（Antoine-Frédéric Ozanam 1813-1853）が設立した社会事業団体。会の名称は、会が守護者として仰ぐ聖人で、貧者の救済に尽くした司祭、聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ（ヴァンサン・ド・ポール Vincent de Paul, 1581-1660）から取られている。

年に発足した公教青年会(第二次)¹³⁾で、山本三郎が会長となった時に、戸塚は安田忠治、渋谷治、小倉信太郎、前田又吉らとともに幹事を務めている¹⁴⁾。1916年に帝国大学医科大学を卒業した際、成績優秀につき恩賜の銀時計を下賜されている。その後、帝大病院医局勤務を経て、1921年に文部省在外研究員として医学研究のため米国、フランス、ドイツへの留学を命じられるとともに、北海道帝国大学助教授に任命された。

1921年7月4日にパリに到着し、皇太子の訪欧の随員でパリ滞在中の山本信次郎と暁星中学校の後輩で画家の長谷川路可の迎えを受けた¹⁵⁾。「留学日記」には、岩下も7月13、14両日に戸塚と会って、モンマルトルなどを訪れたことが記されている。

戸塚は、8月末には岩下の誘いを受けてロンドンに旅行し、岩下が当時共同体的生活(のちに「ボン・サマリタン」と呼ばれる)を送っていたエルムバークのアパートで「シスター・ヴァイオレット」(ヴァイオレット・ススマン 後述)に出会い、これをきっかけとして、カトリック司祭となる召命を自覚したとされる¹⁶⁾。ただし、このあたりは岩下の日記記述が粗になっているため、戸塚について目立った記述はない。

その後、何らかの理由で、岩下がこの共同生活を離れた一方、戸塚はシスター・ヴァイオレット、シスター・ローズとの共同生活を続け、1922年には二人を伴ってパリに転居し、パリ・カトリック大学の神学部に入学した。戸塚は1924年4月に万国布教博覧会の準備委員会の医学委員に任命され、これを機にシスター・ヴァイオレットらを連れてローマを訪れている¹⁷⁾。

¹³⁾ 「公教青年会」は、学生を中心としたカトリックの青年会である。日本最初の公教青年会は、1904年に東京教区初の邦人司祭の一人であった前田長太(1866-1939)とパリ外国宣教会のクラディウス・フィリップ・フェラン(Cladius Philippe Ferrand, 1868-1930)が創設したものである。1900年にフェランが知識人向けの宣教活動を強める事を目的として、東京で創設した育英塾を基盤とするものであった。1905年に8月には『新理想』という月刊誌を創刊している。この最初の公教青年会は、1907年に前田長太が筆禍事件をきっかけに司祭をやめ、フェランが名古屋へ転任させられたことで消滅した。三好千春『時の階段を降りながら 近現代日本カトリック教会史序説』オリエンズ宗教研究所、2021年、p.89 参照。

¹⁴⁾ 『戸塚神父伝』p.54。

¹⁵⁾ 同 p.84。

¹⁶⁾ 同 pp.87-93 参照。

¹⁷⁾ 同 pp.142-146 参照。

岩下も当時、ローマで神学を学んでおり、二人の再会が「留学日記」にも記されている¹⁸⁾。戸塚は、同年6月28日にパリ教区の司祭として叙階された¹⁹⁾。9月末には、布教博覧会医学部委員会に参加するためにローマを訪れ、12月の博覧会の開会式やサン・ピエトロ大聖堂の「聖門」を開ける式に参列した²⁰⁾。その後パリに戻り、1925年1月末にはシスター・ヴァイオレットとシスター・ローズを伴って旅立ち、岩下より一足早く3月3日に帰国している。以後、1925年の「留学日記」には戸塚とのやり取りは記載されていない。

おぐらのぶたろう

小倉信太郎 (1894-1924) は、東京市本所区に生まれ、横川町のカトリック教会 (現本所教会) で受洗した²¹⁾。暁星中学校と第一高等学校で岩下と戸塚の後輩に当たり、「聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ会」にも加わり、カトリック研究会にも出席している²²⁾。小倉は帝大法学科を卒業し、大学院入学直後に、岩下と同じ船で渡欧している。「留学日記」によれば、小倉とはマ

¹⁸⁾ 「津留さんのところで戸塚君に会ふ」(1924年4月24日)「午后ミス・ストマンに会ふ、マシニョン教授来訪。」(同4月27日)「クレーヤがきてくれと云ふので参上する、ラザルもみた」(同5月8日)「午後ス・マン訪問」(5月11日)「今日出立と云ふから戸塚君の一行に挨拶にゆく」(5月15日)。「マシニョン教授」はルイ・マシニョン (Louis Massignon, 1883-1962) のことで、カトリックのイスラム学者である。カトリック-イスラムの相互理解の先駆者で、第二バチカン公会議にも影響を与えたとされる。戸塚文卿がボン・サマリタンをパリに移すにあたって保証人となり、その後も長く戸塚やヴァイオレットに関わった(『戸塚神父伝』p.123以下参照)。「クレーヤ」は、パリのボン・サマリタンに加わっていた「シスター・クレーヤ」(クレーヤ・ヘロン)(『戸塚神父伝』pp.122-123、p.134参照)と思われる。「ラザル」もロンドン時代からこのグループに関わっていた人物であるとみられる(「留学日記」でも、ロンドンでシスター・ヴァイオレットらと過ごしていた1921年頃にしばしば言及されている)。

¹⁹⁾ 本来東京教区の司祭として叙階されるべきところ、レイ東京大司教の許可書が届かなかったために、知人のエミール・ギガ公爵のはからいでパリ教区の司祭として叙階されることになったとされる(『戸塚神父伝』p.155参照)。

²⁰⁾ 『戸塚神父伝』では、戸塚が9月にローマを訪れた際に、すでに「博覧会の世話を岩下氏がしていた」が「同氏がヴェニスに移ったあと五百旗頭新治郎氏が代わって世話をしていた」としているが(p.160)、これは間違いである。「留学日記」によれば、岩下が、文部省から博覧会の委員に任命されたのは1924年10月20日であり、岩下は、12月初めにヴェネチアからローマに移り、博覧会関係者と面会し、戸塚にも会っている。また五百旗頭に事務を引き継いだのは、叙階の準備のためにローマを離れヴェネチアに戻った1925年4月である(以下p.14参照)。

²¹⁾ 小倉の死後、弟の小倉和一郎が遺稿や書簡を集めて出版した小倉信太郎『面影』(小倉和一郎編)1928年に略歴が掲載されている。

²²⁾ 「一週間に一度、或司祭の許に教理の研究会が開かれた。三人の外にまだ二人ばかり学生が来てみた。各々順番に何か話すような仕組になつてみた。」(『面影』p.21)「三人」はこの文中では「S・B・N」で表記されている。これは岩下壮一、戸塚文卿、小倉信太郎の名の頭文字であると見られる。

ルセイユまで同道しただけでなく、パリで同じ下宿にいたことがうかがわれる²³⁾。小倉はその後1920年夏に一時帰国し、1921年秋に再渡欧しており、「留学日記」には、1921年10月1日に「小倉さんを迎えにロンドンへ帰る」と書かれている。この秋に、小倉も岩下とともにセント・エドマンズ・カレッジ (St.Edmund's College) の神学校²⁴⁾に入学したと見られる。渋谷治の回想によると²⁵⁾、岩下と小倉は、1923年の春にローマの教皇庁立ウルバノ布教大学(プロバガンダ大学)²⁶⁾に転学した。小倉の手記では、二人は1922年6月から10月にかけて、ドイツ・スイス・イタリアを旅行してローマに到着し²⁷⁾、10月27日にはプロバガンダ大学で七人の日本人神学生に会っており、実際には1922年秋からローマ生活を始めたのかもしれない²⁸⁾。

岩下はプロバガンダ大学に入学して一週間で教授陣に愛想をつかし、ドミニコ会の神学大学

²³⁾ 「留学日記」によれば、1919年10月28日に、岩下と小倉はヴォジラル街 (rue de Vaugirard 61) のマダム・モアロー (Morreau) の家を見下し、下宿にすることを決めている。小倉の書簡 (1920年9月13日付) によれば、小倉は日本に一時帰国するまで、7ヶ月ほどこの下宿で過ごした (『面影』p.82)。一方、岩下は1919年11月末には、パリの大学での勉強に見切りをつけ、1920年1月末から4月初めまではフランス各地を、その後6月から8月まではイギリス各地を旅行しているため、下宿は引き払っていたかもしれない。

²⁴⁾ ロンドンから北に約五十キロ離れたウェア (Ware) 近郊のオールド・ホール・グリーン (Old Hall Green) にあったカトリック学校。元々は16世紀に、宗教改革後のイギリスのカトリックを守るために北フランスのドゥエー (Douai) に設立された神学校が、フランス革命後にイギリスに移ったもの。神学校は、19世紀後半には一時期ハマースミス (Hammersmith) に移されるが、1904年にロンドン大司教のフランシス・ボーン (Francis Bourne) によって戻され、以後1975年再びチェルシーに移されるまで続いた。「セント・エドマンド・カレッジ」は現在、共学のカトリック小学校として存続している。

²⁵⁾ 渋谷治「受品の前後」『声』780号 (1941年2月) p.46。渋谷治の証言によれば、この転学はマゾニ・ビオンディ布教聖省長官の命令だったとされる (『岩下神父の生涯』p.151)。

²⁶⁾ 「教皇庁立ウルバノ布教大学」(Pontificio Collegio Urbano de Propaganda Fide) は、1624年に教皇ウルバヌス七世によって、(非イタリア人) 宣教師養成のために作られた大学。1641年からは布教聖省 (Sacra Congregatio de Propaganda Fide 現在の福音宣教省 Congregatio pro Gentium Evangelisatione) の下に置かれた。

²⁷⁾ 「大正11年10月19日付手記(ローマにて)」(『面影』pp.119-138)。

²⁸⁾ 「大正11年10月27日付書簡(ローマにて)」(『面影』p.108)。別の書簡によれば、既に1922年5月には「この秋にはローマ」という話が出ていた (「1922年5月23日付書簡」『面影』pp.99-100)。ただし、正式入学が翌年であった可能性はある。

「アンジェリクム」(Angelicum)²⁹⁾に移ったとされる³⁰⁾。一方、小倉は司祭の召命は得られなかったとして、1923年7月に帰国し³¹⁾、同年9月の関東大震災に遭遇して体調を崩し、翌年7月に亡くなった³²⁾。「留学日記」には、小倉の危篤や死亡を伝える手紙のやり取りが記されている。また1925年7月1日にミラノを訪れた際、「三年前小倉君とはじめてこゝでイタリアの土をふんだ時を思ふ。今昔の感に不堪 Duomo のあたりを徘徊す」と記されている³³⁾。

^{しごたにおきむ} 渋谷治 (1893-1972) は、大阪府出身。マリア会の明星商業学校を卒業し、日本郵船会社に入社、1912年にマクス・ピュイサン神父より岸和田教会で受洗し(洗礼名ヨゼフ・フランシスコ・ザヴィエル)、1919年上智大学商学部を卒業後、三井物産に入社した。1922年再び上智大学に入学し、広島教区の神学生となって渡欧し、ローマのプロパガンダ大学で哲学・神学を学んだ後、1925年にインスブルックのイエズス会学寮(カニジアム)に移り、インスブルック大学の神学・宗教学部で学び、1928年3月25日に司祭に叙階された³⁴⁾。カニジアムに移ったのは、岩下壮一の推奨によるとされる³⁵⁾。

「留学日記」では、1924年から1925年までしばしば手紙のやり取りが記されており、暁の星の祈祷会のカードなども送信している(1924年9月22日)。渋谷は、1928年に帰国後、岡山教会主任司祭となり、同地に岡山カトリック思想科学研究所を設立。1944年には東京大神学校の教授を務めた。戦後は長崎の西黒崎教会、西彼伊王島教会、深堀教会などの主任司祭を務めている。

²⁹⁾ ラテン語「天使大学」(collegium angelicum)。「教皇庁立聖トマス・アクィナス大学」(Pontificia università San Tommaso d'Aquino)のこと。トマスが「天使的博士 (doctor angelicus)」と呼ばれたことからこの名がある。

³⁰⁾ 渋谷治「受品の前後」(前掲) p.46、『岩下神父の生涯』p.151 参照。

³¹⁾ 渋谷治「受品の前後」(前掲) p.46 参照。

³²⁾ 『面影』の「略伝」参照。

³³⁾ 小倉の「大正11年10月19日付手記(ローマにて)」(『面影』p.130)にも、岩下と共に「Duomo (カテドラル)」を見て回ったという記載がある。

³⁴⁾ 「新たに挙げられた兩名の法人司祭」『声』628号 p.68(「教会の知らせ」)参照。渋谷治の略歴は『岡山カトリック教会百年史』1983年 pp.122-125 参照。同資料については時苗博道氏よりご教示いただいた。

³⁵⁾ 渋谷治「受品の前後」『声』780号(1941年2月) p.47。

次に日記に数多く登場するのは、経済学者^{いおきべ}五百旗頭眞治郎(1894-1958)である。五百旗頭は、1918年5月に公教青年会に加わったカトリック信徒である。彼は神戸高等商業学校講師在職中の1920年に渡仏し、その後1929年までイタリアを中心にヨーロッパ各地で過ごしたとされる。「留学日記」によれば、1924年3月26日にローマで手紙をもらって来訪し、以後親しく行き来している。6月12日の日記には「夜をそくど屋上でイオキベ君と語る」と書かれている。岩下は、1925年には布教博覧会の仕事に五百旗頭の助力を頼んでおり、4月25日には、博覧会の事務仕事を引き継いだ。

公教青年会の友人では、前田又吉³⁶⁾(1848-没年不詳)、飯島藩司³⁷⁾(1888-1987)らの名がある³⁸⁾。「留学日記」によると前田は、岩下が神戸から乗船するのに先立って京都を訪れた際に出迎えて、一緒に東山や大原を旅行している(1919年8月25日)。飯島とはその日の午後、垂水で落ち合い、海水浴をしたとの記載がある³⁹⁾。日記の記載によると、その日の夜、岩下は前田の実父志方勢七の別荘に宿泊したとみられる。さらに、1920年2月19日・20日にリオンを訪れた際に「野呂氏を三井物産に訪う」「夜野呂氏と会食」などと記されている三井物産リオン支

³⁶⁾ 1920年第一高等学校卒業、1923年京都帝国大学法学科卒業。岩下清周の知人で関西の財界人志方勢七の子で、常磐花壇の経営者で京都ホテルの創業者前田又吉(1830-1893)の養子となったと思われる(「対談 大阪財界昔話」大阪商工会議所『会議所報 Chamber』8月号、p.11。対談者の一人は、飯島藩司である)。

³⁷⁾ 1897年受洗。明星商業学校、神戸高等商業学校を経て、1913年東京高商(東京高等商業学校、現一橋大学)専攻部卒業。経済学博士。1914年神戸高等商業学校(現神戸大学)講師に就任。同校教授を経て、1918年に久原財閥の久原商事に入社。のち大阪鐵工所専務、朝日放送社長、関西経済連合会会長を歴任。飯島は東京高商在学中に、岩下らが設立した聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ会に加わったとみられる。

³⁸⁾ 『声』780号(1941年)岩下壮一追悼号のエミール・エックによる追悼記事に掲載されている「公教青年会草創時代の写真」(p.27)の中に、岩下、戸塚、小倉、山本信次郎、山本三郎らと共に「商大制服制帽の飯島藩司」が写っている。ただし、「公教青年会」(第2次)は1916年の設立なので、この写真はそれ以前のもと考えられる。岩下は帝大の制服制帽、戸塚、小倉は一高の制服制帽なので、小倉が一高に入学した1911年9月から、戸塚が一高を卒業する1912年9月までのものであるとみられる。

³⁹⁾ この時飯島と一緒に言及される「五十嵐」は、暁星中学校出身の後輩五十嵐治孝かもしれない。渋谷治の回想によると、渋谷は一時期、暁星中学校の体育館(雨天体操場)の三階で、一高生の小倉信太郎、五十嵐治孝らと起居を共にしたという(渋谷治「帰朝までの岩下壮一師」『日本カトリック新聞』昭和15年12月22日参照)。

店勤務の野呂省一郎⁴⁰⁾がいる。1920年8月16日にロンドンのテイト・ギャラリー(Tate Gallery)で出会ったと書かれている「小高」は公教青年会会員の小高親⁴¹⁾とみられる。また1924年に何度か手紙を書いている「石川」は、石川鶴二⁴²⁾であると考えられる。

もう一人、一高時代からの友人として交遊しているのが久保 勉^{まさる} (1883-1972)である。久保と岩下は、共に1909年東京帝大文科大学哲学科に入学し、ラファエル・フォン・ケーベル(1848-1923)に師事した。久保は1925年から1928年までドイツに留学した。「留学日記」では、1925年7月9-10日にかけてフランクフルトで一緒に過ごしている。その後、9月11日には久保がヴェネチアを訪れて数日過ごし、同19日にはフィレツェの久保の滞在先を岩下が訪れている。更に同月27日には久保がローマに來訪している。また岩下は、帰国直前の10月31日に

⁴⁰⁾ 野呂省一郎は1917年東京帝国大学法科大学政治学科を卒業して、同年に見習として三井物産に入社。1918年1月にロンドン支店リヨン〔里昂〕出張員附となり、1920年9月からは生糸部リヨン支部勤務となり、1928年まで在職した(その後は退職し、仏蘭西物産株式会社員となった)。野呂が公教青年会の会員であったことについては、井伊義勇『復生の花園』一路書苑1941年、p.137参照。また、『声』780号の「公教青年会草創時代の写真」にも名前がある。なお、矢内原忠雄の日記(1913年4月28日)によれば、離任する新渡戸稲造校長に花環を贈呈した際の発起人の一人として名前が挙げられている(『矢内原忠雄全集』第28巻、岩波書店、1965年)。

⁴¹⁾ 岩下の著書『愛と理性と戦争：加持力教会と徴兵忌避事件』(カトリック叢書1.2)カトリック研究社、1926年p.13に「三菱の職工監督をしてみた余の親友、小高親氏」という言及がある。『声』521号(1919年4月)p.44の社有消息に「住友製銅所販売店」に転勤という記事があり、『日英新誌』54号(1920年5月)p.12に「住友伸銅所販売部神戸出張所長」の「小高親」の着英の記事がある。小高は『カトリック』に多くの論考を寄せている。

⁴²⁾ 『カトリック』3巻7号pp.48-52に「親愛なる晃兄へ」という、ドイツのカッセルから荻原晃に宛てた手紙の形を取った石川の手記がある。その中に、友人の岩下と荻原を引き合わせようとしたこと、ローマの岩下から手紙をもらったこと、カッセルを岩下が訪問したことなどが、召命に思い悩む気持ちとともに綴られている。岩下からは「僕は何年間神と戦った事だらうか?／然し神はついに勝たれた。／僕は敗れたのだつた／然しそれは当然の事である。／神は勝たれた以上はすべて力を与えて下さる。情に対しても又肉に対する力を与えて下さる。／さうして自分が神に負けたと気付いた折に自分は高い所まで上げられてみたのだつた」と言われたと回想している。なお、小倉の1922年10月19日に記したという旅行記風の書簡(『面影』p.119-138)では、10月8日に「岩下君にとっては此の旅の眼目と云うべきカッセルに着く。二人でキヨロキヨロと石川鶴二を探す。稍日本人らしい青年を見つけた。果たして石川君だつた。二人とも初対面。」(pp.120-121)とあり、一緒に食事をしたり、遠足に行ったりしている。2日後小倉は岩下をカッセルに残し、ベルリン、フランクフルトを経由して13日にハイデルベルクで再会している。石川が回想しているのはその間の出来事であろう。なお、石川はカッセルで「日独貿易商会(Haus für Japanisch-Deutschen Export und Import)」を経営していたとされる(東京商工会議所『商工月報』1926年9月p.90)。

はローマの久保の滞在先 Pension Boos を訪れている。

それ以外には、一高で1906年入学の同級生で、一高のドイツ語教授となった立澤剛(1888-1946)がいる⁴³⁾。立澤は、1924年の夏学期から1925-26年の冬学期までハイデルベルグに留学した⁴⁴⁾。「留学日記」によれば、立澤は1925年4月3日に、同僚の速水滉(1876-1943 一高の哲学教授)と共に、ローマの布教博覧会の見物に訪れている⁴⁵⁾。また、岩下が7月8日にミュンヘンを訪れた際にも立澤と会っている。

暁星中学校出身者では、岩下がパリに着いたときに、在フランス大使館三等書記官をしていた横山正幸(生没年不詳)がいる。ホテルが見つからなかった岩下のために、横山は一緒にホテル探しに奔走し、結局、自宅に宿泊させている。また下宿が見つかるまでの間、岩下や小倉に宿を提供していた⁴⁶⁾。また、ベルギー公使、フランス公使、ロシア大使などを歴任した本野一郎の長男で子爵の本野盛一(1895-1953)の名も見られる。パリ講和会議の全権公使西園寺公望の随員として渡仏していた⁴⁷⁾。

さらに「留学日記」にしばしば「藤井」として言及され、手紙のやり取りもしているのが藤井武夫(1895-1965)であると考えられる。藤井については、「ハンベル⁴⁸⁾さんから藤井がシエレル師⁴⁹⁾のもとへ行つたことをしらしてくれた」(1924年1月9日)「藤井から手紙カトリック

⁴³⁾ 『岩下神父の生涯』、p.20。立澤剛「岩下君の思出」『一高同窓会報』第45号。

⁴⁴⁾ 久野譲太郎「ヴァイマル期ハイデルベルグ大学への日本からの留学状況とその歴史的背景」*Bunron, Zeitschrift für literaturwissenschaftliche Japanforschung*, Heft 8, Heidelberg, 2021, 230-274, S.260。

⁴⁵⁾ 布教博覧会訪問については、立澤自身も岩下の追悼記事で触れている(「活潑な岩下君」『声』780号(1941年2月) pp.49-50)。

⁴⁶⁾ その時の事情については、岩下「導かるゝまに」参照。「留学日記」によれば、パリ到着後、宿が見つからなかった岩下は、横山正幸の家(Rue de Tocqueville 22)に宿泊している(1919年10月15日)。また、小倉の書簡(1919年10月23日付。『面影』p.63参照)によれば、小倉も宿を見つけるまでの間、横山宅に宿泊している。一方、岩下はアンソニーのマリア会の修道院に部屋を与えられていた。

⁴⁷⁾ 小野盛一・晴子は西園寺公望らと丹波丸で1919年2月26日にマルセイユで上陸している(『日英新誌』40号p.8)。

⁴⁸⁾ マリア会司祭で、暁星中学校や一高・東大教えたアンリ・ハンベルクロード(Henri Humberclaude 1978-1955)のことか。ただし、同じく日本在住のマリア会士にピーエル・ハンベルクロード(Pierre Humbertclaude 1899-1984)もいる。

⁴⁹⁾ 「シエレル師」はパリ外国宣教会司祭のジャン＝フェリクス＝マリー・シエレル(Jean-Félix-Mari

教徒になりたいと云つてよこした、感謝」(同1月16日)「藤井から吉報 Deo Gratias!」(同11月13日)という記載がある。他にも、藤井が岩下に日本の雑誌を送り届けたり、岩下も藤井に書籍を送ったりしていることがうかがわれる。藤井は1924年12月24日に神田教会で受洗した⁵⁰。岩下が在職中の1918年の第七高等学校英文科一年生の学生名簿の中に名前がある(「仙台第一 藤井武夫 滋賀」)ので、七高時代の教え子であるとみられる。藤井はのちに高松経済専門学校長、香川大学経済学部初代学部長などを歴任。1949年7月の香川大学開学式で藤井は、学長事務取扱として挨拶し、その中でニューマンの『大学の理念』(*The Idea of An University*)を引用したとされる⁵¹。

③日本人カトリック司祭、修道者、信徒

留学中の日記であるため、カトリック司祭、修道者は圧倒的に外国人が多いが、日本人では、渋谷治(前掲)、山口愛次郎、山中巖彦、松下佐吉、荻原晃、阿部義敏、武宮隼人、林乙女らの名前がある。このうち、渋谷、山口、山中、松下は、岩下が小倉と共に、ロンドンからローマに移ってプロバガンダ大学に入ったときの在學生である。

山口愛次郎(1894-1976)は、長崎県出身。ローマのプロバガンダ大学で学び、1923年に叙階された。1924年の日記を通して、岩下のローマ滞在時にしばしば会っているという記述が見られる。同年7月には山口がヴェネチアを訪れ、十日ばかり滞在している。その後、山口は帰国して、五島列島の鯛ノ浦教会の主任となっており、以後は手紙のやり取りが記載されている。11月21日の日記には、山口に国際カトリック連盟の書箋紙を送ったことが記されている。山口は1926年には長崎公教神学校の教授となり、中町教会主任司祭を経て、1936年には鹿児島使徒座知牧区長、1937年に長崎司教を歴任することになる。戦後、長崎教区が大司教区となっ

Cherel 1868-1948)。1892年に来日し、1905年から1938年まで神田教会主任司祭を務めた。

⁵⁰ 神田教会の洗礼台帳によると1924年12月24日の受洗者に「Augustinus Fujii Takeo 1995.12.26生」という名前がある。

⁵¹ 高松市・北條時重編集発行『又信回顧三十五年』1959年、p.122。「又信学園」は高松高等商業学校の愛称。

たことにより、長崎大司教となり、1962年-1965年まで第二バチカン公会議に参加している。

1968年長崎大司教退任。

山中^{いづみこ}巖彦(生年不詳-1979)もプロバガンダ大学で学び、1925年4月11日にローマで叙階された⁵²⁾。岩下も同日、叙階式に与り(「午前式にあずかり」、翌12日には、山中の初ミサの助祭を務めたことを日記に記している⁵³⁾。帰国後は、舞鶴教会主任司祭等を務めた。カトリック関係の多くの著書や訳書がある⁵⁴⁾。

松下^{しんか}佐吉(1896-1986)は長崎県西彼外海村出津出身。山中と同じくプロバガンダ大に在籍し、同じ日に叙階された。岩下も4月13日には、松下の司式するミサに与ったことを記している。1925年10月から浦上教会助任司祭。その後、堂崎教会、福江教会など長崎教区司祭を務めた⁵⁵⁾。

なお、山口、山中、松下らは、1921年に皇太子が訪欧してヴァチカンを訪れた際に、立花国三郎、野田時彦と共に、皇太子に拝謁している⁵⁶⁾。一方、岩下はルーヴァンで皇太子を接遇した⁵⁷⁾。

武宮^{たけみや}隼人(1905-1980)は上智大を卒業後、陸軍士官となるが⁵⁸⁾、イエズス会に入会し、1923年9月にス・ヘーレンベルク修練院に入り、1925年9月からファルケンブルクで学んだ⁵⁹⁾。

「留学日記」では、岩下が1925年7月10日にス・ヘーレンブルクを訪問した際に、翌朝のミ

⁵²⁾ 「最近ローマよりの通信によれば、予て同地のプロバガンダ大学に留学中であった松下佐吉師(長崎)及び山中巖彦師(大阪)は去る四月十一日聖土曜日司祭の品級にあげられた。」『声』593号、1925年6月、p.61(「教会の知らせ」)参照。

⁵³⁾ 山中による岩下の追悼記事(「ウルヴァン大学の岩下神父さん」目次では「ウルヴァン大学の師」『声』780号(1941年2月))によると、岩下は、4月4日に山中がマリア会の学校で初ミサを挙げた際にも侍者を務めたとされるが、叙階日と符合しない。山中の記憶違いか、誤植かもしれない。

⁵⁴⁾ 『真の基督教カトリックへ』神戸公教青年会、1928年、『無神論を衝く：全国の教育者に捧ぐ』カトリック思想普及会1936年、『四億人の信仰：カトリックとはどんな宗教か?』『声』社1950年など。

⁵⁵⁾ 『岩下神父の生涯』pp.152-3。また、p.108の写真に姓名がある。

⁵⁶⁾ 『戸塚神父伝』p.54。

⁵⁷⁾ 「留学日記」1921年6月20日に「東宮殿下ルバンへ御来遊」と記している。

⁵⁸⁾ 「新に耶蘇会所属の神学生渡欧」『声』572号、1923年7月、p.54(「教信」)参照。

⁵⁹⁾ 『追悼 武宮隼人先生を偲びて』六甲学院、1981年。

サで侍者をしたことが記されている。1931年8月28日にファルケンブルクで叙階⁶⁰⁾。武宮はのち六甲学院初代校長などを務めた。

荻原晃(1896-1961)も上智大学卒業後、1922年にイエズス会に入会し、オランダのス・ヘーレンベルク('s-Heerenberg)修練院で過ごした後、ファルケンブルクの神学校に入る。岩下は、1925年7月15日にファルケンブルクを訪れた際に、荻原の出迎えを受けたこと、翌日のミサで荻原が侍者をしてくれたことを記している⁶¹⁾。1929年7月29日に叙階、1933年終生誓願。帰国後は広島教区で働き、1940年には広島使徒座代理となった。

もう一人、阿部義敏(1893年-没年不詳)というイエズス会士がいる⁶²⁾。1919年に上智大学を卒業後、慶應大学の文科選科生となり、イエズス会のカタログによれば1923年に入会した。彼は1925年7月10日にス・ヘーレンベルクで岩下を出迎え、翌日のミサに武宮と共に侍者をしている。また、岩下は同年8月15日の日記に「阿部武宮君立願之日」と記している。二人の初誓願の日であろう。1929年8月27日にファルケンブルクで叙階され⁶³⁾、1933年終生誓願、帰国後上智大学教授を務めた⁶⁴⁾。

⁶⁰⁾ イエズス会士の履歴については、イエズス会本部アーカイブのカタログ(<https://arsi.jesuits.global/en/repositories/catalogs-of-new-society-of-jesus/>)及びアメリカ管区アーカイブの物故者一覧(<https://jesuitarchives.org/catalogus-defunctorum/>)参照。武宮の叙階については、「武宮単人師の受品(口絵説明)『声』670号、1931年11月、p.748も参照。

⁶¹⁾ 荻原自身も「七月十五日には今度司祭になられた岩下壯一氏がはるばるローマからファルケンブルクに御出でになり、十六日の朝私は師のゴミサつかへをなし、師の手から御聖體を拝領した。何と云ふよろこびと感謝に満ちた日であつたでせう」と記している(荻原晃「オランダより(1)』『カトリック・タイムズ』第85号、1925年1月11日発行)。

⁶²⁾ 「新に耶蘇会所属の神学生渡欧」『声』572号(前掲)p.54参照。1925年の公教青年会の会員一覧で、神学生・修道志願者の名前として、渋谷治、荻原晃、武宮単人、田口芳五郎、海老彌六、島田実、武宮雷吾、浅井晴雄、河村謙とともに名前がある(『カトリック』1928年4月「公教青年会十二年の回顧」p.46)。

⁶³⁾ *Aus dem Lande der aufgehenden Sonne, Briefe Nachrichten deutscher Jesuiten-Missionare aus Japan*, Nr.5. Oktober 1929 参照。記事によると、始めプロテスタントに接したが、のちにカトリックに出会い、1917年に洗礼を受けたという。

⁶⁴⁾ イエズス会のカタログでは1937年までは(日本を管轄する)下ゲルマニア管区に在籍が記され、上智大学に属しているとされている。ソフィア・アーカイブズによれば、1933年-1935年の文部省報告教員調査にドイツ語担当教員として記載されている。岡野竜一編『八聖殿講演集 第2輯』日本講演通信社1935年に「カトリックからみた愛国心」という論稿がある。「八聖殿」は、安達謙蔵が建立した建造物で、キリスト、ソクラテス、講師、釈迦、聖徳太子、空海、親鸞、日蓮の8人の聖像を安置

また神学生ではないが、上智大学関係で、星靖という名前がある。彼はヘルマン・ホフマン(Hermann Hoffmann, S.J. 1864-1937)が1925年6月にローマで開催されたイエズス会の会議のため渡欧した際同行した上智大学の学生であった⁶⁵⁾。「留学日記」では、7月10日の日記に「ホフマン師同道の星靖氏と快談」と記されている。

妹亀代子をのぞいて、唯一日本人の女子修道者として登場するのが、林乙女(1899-1984 洗礼名アンナ、修道者名スザンナ)である。林は、メリノール女子修道会修道者である⁶⁶⁾。函館生まれで、聖保祿女学校(現在の函館白百合学園)を1917年に卒業したのち⁶⁷⁾、1924年2月入会した。岩下は、1925年11月24日にニューヨークでメリノール会本部を訪問した際に会ったことを記している。1927年初請願、1930年終生誓願。ロサンゼルスメリノール学校で21年間日本語を教えたのち、1950年に日本に派遣された。1961年にアメリカに戻り、米国市民権を取得、その後また日本に戻った⁶⁸⁾。1970年に引退しアメリカに帰国した。

その他、氏名不詳であるが、1925年7月12日から15日にかけてオランダのオーステルハウト(Oosterhout)のベネディクト会(ソレムス会)の聖パウロ修道院(Abbaye Saint-Paul

するもの。1932年から1942年まではほぼ毎月様々な講演会が開催されていた。この「第2輯」1934年4月から11月にかけて行われた第14回講演の内容を収録したものである。仏教や儒教などの立場からの講演と並んで、阿部のものとカンドウ「カトリックと国家」が収録されている。いずれも1934年11月11日に行われた講演録である。この講演に触れた『声』708号(1935年1月)の記事でも、阿部は「上智大学教授」とされている。

⁶⁵⁾ 荻原晃「オランダより(1)」『カトリック・タイムス』第85号(前掲)。荻原の記事によれば、星はその年の復活祭で洗礼を受けた上智大学の学生であった。

⁶⁶⁾ 略歴は、Maryknoll Mission Archives 参照(<https://maryknollmissionarchives.org/deceased-sisters/sister-anna-otome-hayashi-mm/>)。同アーカイブの記録によれば、最初はカトリック津教会で働いた。

⁶⁷⁾ Maryknoll Mission Archives では、林は北海道の「サンモール女子修道会」の学校を出たと記載されているが、当時、函館(北海道)には同会の学校はなく、シャルトル聖パウロ修道女会の聖保祿女学校の仲間である。林の学校と卒業年については、林の親族がメリノール会関係者に宛てた手紙に記載があるとのことである(メリノール会員からの情報提供)。なお、林をメリノール会に導いた日本人女性修道者に明石志都香(1899-1944 修道者名マリアンナ)がいる。明石は南樺太生まれで、函館の聖保祿女学校で学び林と知り合ったという。その後、明石はトラピスト女子修道会の修道者となり、1921年にメリノール会に入会した。なお、林は聖マリアンナ医科大学の創設者でカトリックの明石嘉聞(1897-1973)の妹であり、現在の大学名は妹の修道者名から取られている。

⁶⁸⁾ 1966年-72年には滋賀の大津教会で働いたという記録がある(「大津教会の歴史」https://www.eonet.net.jp/~catholic-otsu/history_of_church.html)。

d'Oosterhout)を訪れた際に、「武澤理神父」(または武津)と出会ったことが記されている。

その他、カトリック人脈では、ロンドンで歯科医を開業していた小池賢(生没年不詳)がいる。1925年7月から8月にかけてロンドン滞在中に「小池さん」「Dr. Koike」などの言及がある。小池は、1919年にLondonの33 Tottenham Court Roadに開業し(「東京歯科医院」)、1922年からは80 Duke Street(日本大使館の隣)に移り、1930年代に帰国するまで歯科医を開業した。May Alouis Samuels(1887-1949)と結婚し、1922年12月30日に生まれた息子にXavier Hideoという名前をつけているので、カトリックの信徒であったと思われる⁶⁹⁾。息子の洗礼名は岩下の洗礼名からもらった可能性もある。

1925年11月には帰国の途上、アメリカのワシントンで澤田節蔵(1884-1976)と会っている。外交官として1925年にワシントン赴任。東京教区司祭澤田和夫、歴史学者澤田昭夫らの父である。

④軍人・外交官

岩下の留学は前述のとおり、第七高等学校教授としての文部省の派遣によるものであり、公用旅券を支給されたものであった。そのためもあってか、滞在先で大使館関係者、特に海軍の駐在武官などとの交遊が記されている。これについては、海軍軍人でヨーロッパ駐在武官も務めた山本信次郎の後ろ盾もあったと考えられる。

山本信次郎(1877-1942)⁷⁰⁾は、暁星中学校出身で在学中にカトリックの洗礼を受け、日露戦争の軍功によって知られ、当時、日本人カトリック教徒としては最も著名な人物の一人であった。弟の山本三郎は前述のように暁星中学校で、岩下の友人であり、その洗礼の代父をつとめ、岩下の義弟となった。

⁶⁹⁾ Keiko Itoh, *The Japanese Community in Pre-War Britain: From Integration to Disintegration*, Richmond 2001, p.83. 小池賢の経歴については、伊藤恵子氏より直接情報を提供いただいた。

⁷⁰⁾ 山本信次郎の経歴と事績については、大瀬高司「カトリックの信仰を生きた山本信次郎」①～⑫(『福音宣教』2019年1～12月)、同「近代日本とカトリック教会——山本信次郎研究ノートより」①～⑫(『福音宣教』2020年1～12月)、山本正『父・山本信次郎伝』中央出版社1993年、皿木喜久『天皇と法王の架け橋 軍服の修道士 山本信次郎』産経新聞出版2019年がある。

山本は第一次世界大戦中イタリア駐在武官を務め、パリ講和会議では海軍代表委員竹下勇の随員となった。岩下が1919年夏に渡欧した際には、講和会議は終了しており、日本全権団は帰国していたが、山本は日本の信託統治領となった南洋諸島の宣教師派遣問題についてバチカンと協議するために残った。8月5日にバチカン入りし、10月14日に覚書を交換、16日には教皇ベネディクト十六世と謁見している⁷¹⁾。岩下がパリに着いたのはその留守中の15日であった。10月29日には、岩下を伴い、ベルギーを訪問し、ルーヴァンでカトリック人脈と引き合わせている。特にその後の岩下の人生に大きな転機となったと思われるのが、「マテオ神父」と呼ばれるマテオ・クロウリー=ボーヴィ (Mateo Crawley-Boevey 1875-1960) に引き合わせたことである⁷²⁾。

また、1921年に山本が当時の皇太子裕仁親王の訪欧の随員を務めた際もロンドンなどで面会している(5月11日、17日)。また、前述のように皇太子が6月20日にルーヴァン大学を訪問したときに、岩下が案内役を務めているが、これも山本の計らいであっただろう。

その後も、留学期間全体を通じて交遊や手紙のやり取りがあるが、中でも重要なのは「暁の星」(Stella Matutina)の祈祷会である。これはもともと山本がイタリア駐在武官時代に、ローマのマリア会学校校長のエルネスト・モーリス (Ernest Maurice) と共に「東洋民族改宗祈祷会」を立ち上げたことに始まる。山本は、1917年イタリアの女性画家フランキ・ムッシーニ (Luisa Mussini-Franchi 1865-1925?) に、富士山の風景と聖母子を描く像を描かせた。1918年には、教皇ベネディクト十五世により、この聖画にむかって「日本改宗を求める祈り」を唱えるたびに、三百日の贖宥しよくゆう(免償)を与えるとされた⁷³⁾。「留学日記」には、岩下がこの事業を継承し、英・独・仏・伊・スペイン各国語の祈りを印刷したご絵を印刷するなどしていることがうかが

⁷¹⁾ 大瀬高司「カトリックの信仰を生きた山本信次郎④ 初代駐日教皇使節の任命」(『福音宣教』2019年4月)、p.48以下参照。

⁷²⁾ この経緯は、岩下の印象的な手記「導かるゝまゝに」で触れられている。

⁷³⁾ 岳野慶作「暁の星の原画をたずねて」『カトリック新聞』1961年10月22日(『岩下神父の生涯』p.163参照)。パリ大学のカトリックのイスラム学者で戸塚文卿の支援者ともなったルイ・マッシニョンもこのカードの頒布に関わっていた(岳野慶作「ルイ・マッシニョンの追憶」『カトリック新聞』1963年2月10日、『戸塚神父伝』pp.157-159)。

われる⁷⁴⁾。

軍人ではもっとも数多く「留学日記」に記されているのが、カトリックの海軍軍人で1922年から在イタリア駐在武官を務めていた津留信人(1883-1969)である。公教青年会を通して、渡欧前からの知り合いだったと見られる。日記では1924年の年初から、津留が任を離れたと見られる翌年夏頃まで⁷⁵⁾、ほぼ毎週のように登場し、津留の家に出入りするなど、頻繁な付き合いがあった様子がかがわれ、親しみを込めて「津留さん」「ツルさん」などと記されている⁷⁶⁾。たとえば1924年の新年には「津留さんのところで一寸トランプなぞいじくつてお正月らしい気分になった」と記されている(1月6日)。ほかには、日本からの手紙や為替の受取を頼んだり、ヴァチカンの布教博覧会の仕事のサポートをしてもらったりしていた。夫人⁷⁷⁾ともつきあいがあり、布教博覧会に関連して、お茶の接待を依頼しているとみられる記述もある(1925年2月11日、21日)。津留はローマ教皇から二度に渡って勲章を授与されている他、帰国後の1927年大正天皇の大葬の際、教皇使節の接遇を担当していることが知られる⁷⁸⁾。なお、都留の

⁷⁴⁾ 「留学日記」では、1925年7月17日には、山本の協力者だったベルギーのカトリックの有力者シモン・ドブローージュ(Simon Deploige 1868-1927)から「山本信さんの事業に千フラン」貰ったことが記されている。また、各国語版の祈りのカードを作成し、前述のように(p.8参照)、妹亀代子にそれを送ったほか、様々な人物に送付している。1924年の日記の末尾のメモには、英、独、伊、スペイン各国語のカードの送付先リストがある。日本には「テキストなし」のものとして記されている(ヨーロッパでは日本語印刷はできなかったためだろう)。スペイン語のカードを作った経緯については、岩下自身が1926年4月18日の「信徒懇親会」における講演で述べている(『スペインの『暁の星』★岩下氏の帰朝談「スペインの旅」より』『声』780号(前掲)pp.43-44)。

⁷⁵⁾ 外務省の資料によれば、1925年4月には帰国が発令されているが、「留学日記」で6月29日に「夕方津留氏夫妻の来訪」とあるので、しばらくは引き継ぎや後片付けのためにとどまっていたと思われる。『日英新誌』117号(1925年8月)p.10の「日本郵船最近帰朝者」一覧で、箱崎丸(8月15日発)による帰朝者一覧に名前がある。同日の「留学日記」によれば、ロンドンで「津留さんのウィスキー」と記されており、饅頭に送ったのだろう(前日の買い物リストみられるものWhiskyの記載がある)。

⁷⁶⁾ 『岩下神父の生涯』所収の写真(p.108の次頁。渋谷治提供)で、プロバガンダ大学ウルバノ寮において都留が岩下、渋谷、山口愛次郎日本人神学生と共に写っているものがある。

⁷⁷⁾ 津留夫人は、プロテスタントのキリスト者で、第一高等中学校教諭(内村鑑三と同僚)、第二高等学校教授、海軍教授・無線電信調査委員などを務めた木村駿吉(1866-1938)の長女(スイ子 1894年生)であった。スイ子は、1923年に日本郵船の榛名丸で渡欧している(『日英新誌』93号(1923年月)参照)。

⁷⁸⁾ 津留は後年、岩下のもとで裾野の不二農園の農園長をしていたという記事がある(大澤章「知と徳」『カトリック研究』1941年3・4月号、p.64)。津留と仲省吾(後述)は、岩下の父清周の親友であっ

後任の在イタリア駐在武官は、「留学日記」で10月23日などに言及のある**糟谷宗一**(1885-1942)である⁷⁹⁾。

1919年のヨーロッパ渡航の賀茂丸に乗り合わせたのが、イギリス駐在のために夫人と共に赴任の途上だった陸軍少将の**伊丹松雄**(1875-1957)である。船内では一緒にデッキ・ゴルフなどに興じている他、11月にロンドンを訪問した際などにも交際している。同乗者として、海軍造船少佐**八代準**(1884-1963)、海軍造兵大技士**山田幸五郎**(1889-1998)らも言及されている。八代は、1908年東京帝大工科大学造船学科卒、1909年大学院卒で海軍造船技士となり、1919年8月に英国出張を命じられる(1921年3月まで)。戦後、大阪大学工学部教授、同学部長などを務めている。山田は戦後、東京電機大学教授、東京写真大学学長などを務めた人物である。

他に日記に言及されるのが海軍中将で子爵の**小笠原長生**(1867-1958)、海軍少佐**鮫島具重**(1889-1966)らである。小笠原は、1914年に皇太子裕仁の教育を担うために設立された東宮御学問所の監事に就任、1921年3月まで務めた、その間山本信次郎がフランス語の進講をしている(1919年4月から⁸⁰⁾)。「留学日記」によれば、岩下の渡欧直後、ロンドンで夕食を一緒に取ったり(1919年11月6日)や、一緒にフランスのランに遊びに行ったりしている(1920年6月2日)。鮫島は、岩倉具視の三男具経の四男で、鮫島男爵家に養嗣子となった。実兄の岩倉具光は、岩下の妹花の夫である。1925年4月在英海軍駐在武官として着任した⁸¹⁾。岩下は1925年7月18日にロンドンで彼の元を訪問している。

陸軍では、1919年11月4日に言及される「田中大尉」は、**田中静彦**(1887-1945)であると見られる。田中は1917年に陸軍歩兵大尉となり、1919年よりオックスフォード大学留学のため、イギリス駐在を命じられた。

軍人では、ほかに1924年11月の「留学日記」で、ベネチアを訪問したことが記されている「水野恭介」がおり、翌年の手紙の宛先では「水野中尉」として言及されている。これは、海

たことから、1929年頃この仕事を引き受けたという(『茶業界』静岡県茶業組合連合会議所、第24巻第2号、1929年2月、p.63)。

⁷⁹⁾ 外務省の記録では、後任の糟谷の到着は7月14日で、8月10日には事務引継が終了している。

⁸⁰⁾ 『軍服の修道士山本信次郎』pp.123-124。

⁸¹⁾ 1925年4月18日ロンドン着の香取丸で妻豊子を伴って着任。(『日英新誌』112号(1925年4月))

軍中尉（のち大尉）の**水野恭介**（1893-1943）であると考えられる。水野はメソジストの鳥居坂教会に属していたという⁸²⁾。

外交官では、先に触れた横山正幸以外に、1921年7月13日にパリで「大使館で杉田氏さんに會ふ」とあるのは、外務省囑託としてパリ講和会議の日本側委員に名を連ねた**杉田義雄**であろう⁸³⁾。また、1924年の春からローマで面会や手紙のやり取りがあり、秋以降は布教博覧会の仕事がらみのやり取りも見られる「田代」は、当時日本大使館三等書記官であった**田代重徳**（1896-1970）であると考えられる⁸⁴⁾。他に、在イタリア大使館の通訳として言及される「井上通訳」（1924年12月8日など）は、在イタリア一等通訳官であった**井上静一**と考えられる⁸⁵⁾。

⑤学者・留学生・文化人

「留学日記」には多くの日本人の学者や留学生も登場する。

まず冒頭に登場するのが、第七高等学校の同僚であった数学者の**高須鶴三郎**（1880-1972）である。岩下は裾野を出発する日の朝、父親と高須と一緒に裾野の農園を見て回ったことを日記に記している。この日のことは、後に高須による岩下の追悼記事で回想されている（日記では、当時の姓で「大田」——高須自身の記述によれば正しくは「太田」——と記している）⁸⁶⁾。前日から裾野に宿泊していた高須は、岩下の母親から、結婚相手にどうかとって女性を紹介され

⁸²⁾ 原誠「戦時下の教会の伝道：教勢と入信者」『基督教研究』63（同志社大学基督教研究会）2002年、pp.59-77、p.60（もとは、大濱徹也『鳥居坂教会百年史』p.241）。また、1923年10月から35年3月までアメリカ駐在でそのあと帰国しているの、帰途、ローマに立ち寄ったのであろう。

⁸³⁾ 外務省資料の「講和委員賞与一件」（大正10年3月18日）参照。

⁸⁴⁾ 田代は、1923年1月から26年まで在イタリア大使館勤務したという。ローマ時代の思い出を後年、回想記『思い出つるまゝ』（非売品1925年）で振り返っている。その中で「横田家の遠い親戚に当たる岩下壯一君があた」ことに触れている（p.52）。「横田」は田代の妻千鶴子の実家である。東京大司教区の所蔵する岩下壯一関係資料の中にあるアンジェリコ大学時代のノートの中に「田代重徳」と手書きされた欧文名刺が挟み込まれている。

⁸⁵⁾ 1927年の外務省資料に、在イタリア大使館一等通訳官として記載されている。井上はのちにミラノ領事を務めた。ムッソリーニのファシズムを紹介した『ムッソリーニとそのファシズム』（実業之日本社1928年 原著 Gino Arias, Balbino Giuliano, Ernsto Condignola, Alberto de Stefani, *Mussolini e il suo fascismo*, Firenze 1926）の訳者、『伊太利語辞典』（第一書房、1936年）の編者として知られている。

⁸⁶⁾ 「七高教授時代の岩下師」（『カトリック研究』第785号（1941年4月）「岩下壯一師追悼号」）。

たこと、また岩下自身から、鹿児島で一女性と婚約したこと、帰国後に結婚するつもりであることを告げられたことを振り返っている。高須は、山口県生まれの数学者で、広島高等師範学校を経て京都帝国大学理工科大学を1916年に卒業して第七高等学校講師となり、翌年教授に任ぜられた。1920年に東北帝国大学講師、翌年第二高等学校教授、1922年東北大学理学部助教授となり、1925年4月から二年間ドイツ留学。1934年に東北帝国大学教授となった。1952年定年退官により、横浜市立大学教授、玉川大学教授、東海大学教授などを歴任した⁸⁷⁾。

ついで、ヨーロッパに向かう日本郵船の賀茂丸で乗り合わせたのが、**飯盛里安**(1885-1992)である(「留学日記」では一貫して「飯森」と表記されている)⁸⁸⁾。飯盛は1910年に東京帝大理科大学を卒業し、大学院に進学。1915年9月には第一高等学校教授となり、1916年に理学博士となっている。翌年には一校教授を辞し、理化学研究所所員に着任した。1919年からのイギリス留学のために乗船していた(同年11月よりケンブリッジ、翌年11月よりオックスフォードで一年ずつ学んだ)。船の中では話が合ったか、宗教について議論を交わしたことが記されている(「飯森氏の宗教観——福音書をお読みなさいとすいむ」(9月9日)、「夜飯森博士と甲板を歩きながら議論、物質究極の実在——神——を如何に考ふ可きか、エネルギー——スピリットの観念」(9月14日))。また、11月にロンドンを訪れた際にも、当地に滞在していた飯盛と食事や買物を一緒にしている。飯盛は、帰国後、理化学研究所の主任研究員となり、研究所の発展に尽くした。

他に1919年11月2日-5日にロンドンを訪問した際に名前と言及のある「熊本氏」は、学習院教授だった**熊本謙二郎**(1867-1938)かもしれない⁸⁹⁾。さらに1920年7月20日にケンブリッジを訪問した際に「**鍋木氏の案内**」と記されているのは、動物学者・昆虫学者で、当時東京帝大理科大学助手として1919年から1921年にかけて欧米に留学した**鍋木外岐雄**(1890-1968)

⁸⁷⁾ 佐々木重夫「高須鶴三郎先生のご逝去を悼む」『数学』26、日本数学会、1974年、pp.95-6。

⁸⁸⁾ この賀茂丸の乗船者の名簿は、ロンドンの日本人会の発行していた『日英新誌』47号1919年11月発行掲載の賀茂丸(10月25日ロンドン着)による来航者一覧で確認できる(ただし、岩下らマルセイユで途中下船した人々の名はない)。

⁸⁹⁾ 『日英新誌』42号(1919年6月)に「堀田伯」の随員として名前と言及され、また乗船者名簿にも「熊本K氏」が記載されている。この「堀田伯」は堀田正恒(1887-1985)であると考えられる。

とみられる⁹⁰⁾。また、1920年のクリスマス(12月25日)の日に、ロンドンで会っている「菊地夫妻」は、物理学者の菊地泰二(1893-1921)かもしれない⁹¹⁾。

1924年1月の始めには、言語学者で京都帝国大学文学部助教授だった田中秀央(1886-1974)、^{ひでなか}また政治学者で同法学部教授だった田村徳治(1886-1958)の名がある。田中は、岩下より三歳年上だが、ケーベル門下であり、1922-24年まで英、仏、独などに留学中だった⁹²⁾。田村は、1922年から二年間ドイツ、イギリス、フランス、アメリカに留学している⁹³⁾。1924年1月1日の日記には二人が岩下を訪問したことが記されている。3日には、岩下は田中をガリグー・ラグランジュの授業に連れて行っている。

1925年の日記で布教博覧会に関連して登場するのが日本の博物学の草分け、棚橋源太郎(1869-1961)である。棚橋は1895年に東京高等師範学校を卒業後、各地の師範学校などで教えたのち、1903年に東京高等師範学校教授となった。1906年には国立科学博物館の全身である東京高等師範学校附属東京教育博物館の主事(のち館長)を兼務、その発展に寄与した。同博物館は1923年の関東大震災で消失、その再建中の1924年に館長と高等師範学校教授を辞任した。1925年から欧米に留学した⁹⁴⁾。「留学日記」によれば、岩下は棚橋を3月28日に駅で出迎え、棚橋が4月9日にパリに向かうまでの間、バチカンの布教博覧会を案内したり、会食し

⁹⁰⁾ 『日英新誌』47号(1919年11月号)掲載の11月1日にロンドン着の熱田丸の乗客名簿の中に「鐘木外岐」という名がある。

⁹¹⁾ 数学者で、ケンブリッジ大学に留学、のち東京帝国大学理科大学長・総長、文部次官・大臣、学習院長、京都帝国大学総長、帝国学士院院長、貴族院議員、枢密顧問官などを歴任した菊地大麓(1855-1917)の次男。爵位を継承、東京大学で物理学を修め、1917年に東大を首席で卒業し、通信省電気試験所、理化学研究所を経て英国ケンブリッジ大学に留学したがロンドンで客死。妻タマは三原繁吉(日本郵船重役、浮世絵収集家)次女。夫人とともに滞英中だったことは、『日英新誌』1921年4月号の死亡記事より分かる。

⁹²⁾ 松平千秋「田中秀央博士の逝去を悼む」『西洋古典学研究』第23巻、日本西洋古典学会、1975年p.167-169参照。

⁹³⁾ 田村の略歴は、高橋克三「人・その思想と生涯³⁷⁾ 田村徳治」『あきた』(通巻85号)1969年6月pp.49-53参照。田村は、1933年にいわゆる「滝川事件」の処分抗議して、京都帝大を退職、関西学院に移ったことで知られる。

⁹⁴⁾ 棚橋の略歴は、齋藤修啓・鈴木一義「棚橋源太郎資料について一棚橋資料目録一」『国立科学博物館研究報告E類(理工学)』第21巻pp.9-57, pp.10-11参照。

たりするなど、接遇している⁹⁵⁾。

もう一人、博覧会関係で岩下が応接しているのが仲省吾(1878-1969)である。仲は1914年に神田小川町に設立された画廊「流逸荘」の経営者で、黒田清輝や白樺派の画家たちとの交流もあり、バーナード・リーチを支援したことで知られる人物である⁹⁶⁾。仲は博覧会において、柳原義光伯所蔵の明治天皇家下賜の薩摩大香炉をピオ十一世に献上するために訪れたとされる⁹⁷⁾。仲はこれがきっかけとなり、その後岩下と親交を深め、やがて岩下が父親から引き継いだ不二農園と温情舎の運営に関わり、さらに岩下が院長を務めた神山復生病院や岩下の起こした学生寮(フィリポ寮)の運営にも携わった。仲は寮の理事を務め、岩下の死後は寮で暮らした⁹⁸⁾。

また、布教博覧会に関連して、文部省宗教局長下村寿一(1884-1965)や北里研究所の寄生虫学者宮島幹之助(1872-1944)との手紙のやり取りが「留学日記」に記されている⁹⁹⁾。

他には、初代東京芸術大学学長となった上野直昭^{なごてる}(1882-1973)の名がある。上野は、1908年東京帝大文科大学哲学科(心理学専攻)卒業。1924年から27年にかけて欧米に留学した¹⁰⁰⁾。

⁹⁵⁾ 『岩下神父の生涯』p.159ではこの「棚橋氏」について、「棚橋一郎」とし「帝室博物館長」としている。これはおそらく、『声』第780号(前掲)に掲載された立澤剛による追悼記事「活潑な岩下君」(談話)(pp.49-50)が、「棚橋一郎博物館長」としているためだと思われる(前期のように、立澤も同時期に博覧会を訪問している)。しかし棚橋一郎(1963-1942)は漢学者で哲学館の講師などを努めたのちに衆議院議員となった人物であるが、「帝室博物館長」だった事実はないので、おそらく立澤の取り違えと見られる。なお、『声』の同号のp.45にも掲載された写真についても、「一九二四年十二月二一日」という日付で、教皇ピウス十一世と岩下、それに「棚橋一郎博物館長」であるとの説明があるが、写真は棚橋源太郎と同定される。なお、この日は博覧会の開会日ではあるが、教皇が日本の展示場を訪れたとは考えにくいし、棚橋がその日に同席したというのは時期的につじつまが合わない。「留学日記」に4月9日に「教皇へ献上式」とあるので、この写真は、その折のものかもしれない。

⁹⁶⁾ 仲の経歴については、横須賀雪枝「流逸荘と仲省吾 大正時代の初期画廊をめぐる」『大正イマージュ』(大正イマージュ学会)第3号2008年pp.86-107参照。

⁹⁷⁾ 「留学日記」1925年4月20日ほか。『声』1959年6月号。岩下の父清周が黒田清輝と親交があったことから、連絡を取って世話になったものと見られる(横須賀「流逸荘と仲省吾」p.97-98)。

⁹⁸⁾ 現在、東京大司教区が所蔵する岩下壮一関連資料は『岩下壮一全集』(全8巻、中央出版社1962年刊)の編者小林珍雄の遺族から寄贈されたものであるが、それらの資料を岩下の死後保存し、小林に託したのは仲である(同上参照)。

⁹⁹⁾ 下村「宗教局長」とのやり取りは、1924年12月から翌年2月にかけて何度か記録されている。また、宮島については、「北里研究所の宮島幹三郎[宮島幹之助の誤記か]氏より問合せ、返事す」(1924年12月15日)とある。

¹⁰⁰⁾ 財団法人芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京美術学

岩下が1925年8月にロンドンを訪れたときに交際している（「British Museum で上野直昭君に会ひ一緒にかへる」8月15日、「小池母子、三浦某と共に来訪、上野直昭氏もきて大に賑ふ」8月21日）。上野はその後、京城帝国大学、九州帝国大学教授、戦後は、東京芸術大学学長、東京国立博物館館長などを歴任した。

経済学者で名古屋高等商業学校教授であった**赤松要**（1896-1874）や物理学者で第三高等学校教授であった**森総之助**（1876-1953）¹⁰¹⁾の名前も見られる。赤松は、1923年11月にドイツ、英国、アメリカへの留学を命じられた。彼は当初ベルリンで学んだが、もともとカントなどに興味を持っており、1925年4月年からは哲学研究のためハイデルベルクに移り、立澤らと共にリッケルトのもとで学び、1926年にイギリス、アメリカを経由して帰国した¹⁰²⁾。森は、1923年から三年間ミュンヘンに留学中であった¹⁰³⁾。岩下は1925年7月7日にミュンヘンで「赤松さん」に会ったこと、翌8日には立澤や「三高の森さんなぞ」と Hof Theater Restaurant で夕食を共にしたことを記している。さらに同年7月19日にはロンドンで「吉武三郎氏を Denbigh St.55 に訪ひ快談」と記しているのは、ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）の日本語講師を務めていた**吉武三郎**（生年不詳-1942）¹⁰⁴⁾であると見られる。

最後に名前だけの言及ではあるが、京都帝大の初代図書館長、第三高等学校教授などを務めた**島文次郎**（1871-1945）¹⁰⁵⁾、**鶴見三三**（生没年不詳）がいる。島は、ひと足早く1919年3月

校篇』(PDF2.0MB) 第3巻、ぎょうせい、1997年、pp.982-984 参照。『日英新誌』109号（1925年1月）掲載の諏訪丸（1月10日ロンドン着）による来航者一覧で、マルセイユ上陸者のリストの中に「朝鮮総督府在外研 上野直昭、文在外研 同久子」の記載がある。

¹⁰¹⁾ のちに湯川秀樹や朝永振一郎らを教えたことで知られている。平沢興『現代の覚者たち』竹井出版、1988年、p.190 参照。

¹⁰²⁾ *Japanische Studenten in Heidelberg—ein Aspekt der deutsch-japanischen Wissenschaftsbeziehungen in den 1920er Jahren*, hrsg. von Wolfgang Seifert, Ubstadt-Weiher, 2013, SS.87-88 参照。赤松の略歴は、小島清「雁行型経済発展論・赤松オリジナル——新興国のキャッチアップ・プロセス——」『世界経済評論』3月号（2000）p.9 参照。

¹⁰³⁾ 大久保茂男「湯川秀樹先生のはじめての胸像は何故高知に建てられたか」『素粒子研究・電子版』Vol.28（2019）no.4, p.19 参照。

¹⁰⁴⁾ 横山學「知日家英国人特派員（フランク・ホーレー）の伝えた日本」『比較日本学研究センター研究年報創刊号』（お茶の水女子大学）p.10 参照。

¹⁰⁵⁾ 饗庭基介「島文次郎 本館初代館長略伝」『静侑1999』臨時増刊号、1999年11月。饗庭基介「京大図書館史こぼれ話 第十回」『大学図書館問題研究会』会報（京都支部）227号（2004.7-8）参照。

に欧米留学に出発していたが、岩下は渡航前に京都に立ち寄った際、銀閣寺近くの島の実家を訪れ、義母から荷物を預かっている(1919年8月25日「銀閣寺を小倉と前田が見物してゐる間に島氏宅により届物を貰ふ、文学博士の息子さんに「丈夫で早く帰つてきてくれ」との母堂の伝言、何處も変らぬ母の情!」。)実際に、島に会って荷物を渡すことが出来たかは不明である。鶴見は1925年2月3日の手紙の発信相手である。鶴見は医学者で、1924年1月から国際連盟保健委員会の日本代表だったので¹⁰⁶⁾、布教博覧会関係の仕事で連絡を取ったのかもしれない。

⑥その他

岩下はヨーロッパへ向かう途次で、父親がかつてバリ支店長などを務めた三井物産の関係者の世話になっている。1919年8月30日に上海で「三井の池田氏」の出迎えを受け、市内観光のち、蘇州の料亭で接待を受け、翌日は夕食をごちそうになっている。これは三井物産上海支店庶務掛をしていた池田重雄とみられる¹⁰⁷⁾。9月5日に香港に寄稿した際も、「桜井氏」の出迎えを受け、「住井支店次席」の世話になっている。「桜井」は香港支店庶務係の桜井重義(1994-没年不詳)¹⁰⁸⁾、「住井」は、1897年三井物産に入社し、三井物産香港支店次長を務め、後に代表取締役社長になる住井辰男(1881-1962)であろう¹⁰⁹⁾。9月11日にシンガポールでも三井物産の案内を受け、社宅で食事をごちそうになっている。9月19日のコロomboでも三井物産関係者に観光案内をしてもらっている。さらにコロomboの記述に「柴垣夫人負傷事件、英官憲の横

¹⁰⁶⁾ 青木國雄「鶴見三三教授と国際連盟保険委員会報告」(第113回日本医史学会総会 一般演題)2012年参照。

¹⁰⁷⁾ 池田重雄は1917年に東京帝国大学法科大学独法科を卒業し、同年に見習として入社、上海支店に配属された(以下、三井物産関係者の経歴や肩書は、三井文庫が収蔵する社報や職員録による)。

¹⁰⁸⁾ 桜井重義は、1994年生まれ。1919年に拓殖大学(東洋協会大学)を卒業して、同年に見習いとして入社、香港支店に配属された。1921年に本店勤務となり、同年に退職している。その後はジャーナリズムに転じ、新聞聯合社奉天支局長、大阪毎日新聞新京支局長などを経て、1937年に設立された新京自動車の専務になるなど満州財界人となった。桜井の生年は、『満州紳士録第2版』(1940年)による。

¹⁰⁹⁾ 住井辰男は、1919年より香港支店次長となり、1920年本店本部参事となるまで在職した。

暴」という記載がある。この「柴垣」は三井物産コロombo出張員の柴垣良¹¹⁰⁾であると考えられる。船内の記事にある「三井カルカッタの阿部氏」はカルカッタ支店長代理の阿部吟次郎(1988年-没年不詳)¹¹¹⁾、「三井物産カルカッタ詰田村氏」は同支店船舶受渡係の田村次郎¹¹²⁾であるとみられる。さらに10月13日にマルセイユに上陸したときも、三井代理店の「浜崎氏に御馳走になる」と記載されている。これは、マルセイユ派出員であった濱崎素(1979-没年不詳)であろう¹¹³⁾(これ以外の三井物産社員に先に触れた野呂省一郎がいる)。

また、賀茂丸で乗り合わせて、その後ロンドンでも交際しているのが、時事新報特派員下田将美(1980-1959)である¹¹⁴⁾。1919年11月3日の「留学日記」には、ロンドンの日本料理店「生いくいね稲」¹¹⁵⁾で、伊丹夫妻に招かれ、飯盛、下田らと鳥のすき焼きを振る舞われ、そのあと、「(下田の)下宿に帰って十二時迄下田君と非戦論につき議論す」と記している。他の同船者と

¹¹⁰⁾ 柴垣良は1906年に東京高商を卒業し、同年に見習として入社、1913年から1918年頃までムンバイ支店勤務、1919年5月にコロombo(古倫母)支店出張員兼務となり、コロombo在勤となっていた(1920年11月まで)。

¹¹¹⁾ 阿部吟次郎は、1911年東京高商を卒業し、同年に見習として入社、1919年から1922年までカルカッタ支店勤務となった。カルカッタ赴任のために賀茂丸に乗船していた。狩猟を趣味とし、『狩猟界』などに寄稿している他、『角』という著作(非売品、1939年)を残している。阿部の生年は『大衆人事録第11版』1935年による。

¹¹²⁾ 田村次郎は、1914年に東京高商を卒業し、1916年に見習として入社、1917年にカルカッタ(甲谷田)出張所勤務となった。1921年にはムンバイ(孟買=ボンベイ)支店勤務を兼務し、1923年に帰国している。このときは、一時帰国後のカルカッタに戻るために賀茂丸に乗船していた。

¹¹³⁾ 濱崎素は、1903年に東京高商を卒業し、1905年に入社。1907年にロンドン支店勤務となり、1918年からリヨン出張員、翌年にはマルセイユ派出員を兼務した。1919年12月にはマルセイユ派出員兼務を解かれ、1920年5月には生糸部リヨン支部長兼務となり、1925年に本店勤務となるまで在職した。生年については『大衆人事録 第3版 タ-ワ之部補遺』1930年による。

¹¹⁴⁾ 『日英新誌』47号(1919年11月)発掲載の賀茂丸(10月25日ロンドン着)による来航者一覧参照。

¹¹⁵⁾ 「生稲」は、生稲重吉が初めたロンドンの日本料理店の一つ。與謝野鉄幹・晶子のエッセイ「巴里より」(1914年刊)の中で、1912年7月にロンドンを訪れた際、日本料理屋の「生稲」に招かれたという記載がある(「倫敦を立たうとして」)。ただし、生稲はその後、この店をやめて、西洋料理屋「横浜レストラン」(ピリターストリート)を開業したという(『日英新誌』109号(1925年1月)p.13)。岩下訪問時の11月の『日英新誌』26号(1918年11月)に掲載の広告によれば、「会席、仕出し、いく稲」(25 Fitzroy Square)とある。『日英新誌』68号(1921年11月)には「いく稲」の店主板谷正太郎が、名称使用契約の期限満了により「いく稲」を閉店し、場所を移して「いたや」(47 Gerrard Street, Shaftesbury Avenue, W.C.1)を開業する旨の告知がある。

しては、古河商事社員川野秀松(岩下は「河野」と表記)¹¹⁶⁾がいる。

もう一人、ジャーナリストでは、1925年6月30日に都留宅での昼食に同席の「日々記者新妻莞」がいる。これは当時東京日々新聞者の整理部副部長で洋行中であつた新妻莞^{かん}であるとみられる¹¹⁷⁾。

これ以外の日本人名としては、岩下が読んだ著作の作者として、長塚節、姉崎正治、倉田百三、高須梅溪(高須芳次郎)の名が言及されている。岩下は渡欧の船旅で、長塚節『土』(1912年刊)を読んでおり、「小説土を読みふける、読みづらいがいやな気は少しも起らぬ眞摯」と記している(1919年9月4日)。また、1924年8月27日には「今日も姉崎博士の仏文日本宗教史¹¹⁸⁾のノートタイプする」と書かれている。倉田百三『愛と認識の出発』(1921年刊)は、1925年1月2日に「読了」と記されている。一方、日本への帰国の船上で「高須梅溪の文藝史論」(『近代文芸史論』日本評論社1921年刊)を読んでいる(1925年11月12日、17日)¹¹⁹⁾。

(2) 外国人交遊録に続く

※本研究はJSPS科研費JP21K00097の助成を受けたものである。

¹¹⁶⁾ 『日英新誌』47号の賀茂丸による来航者一覧参照。

¹¹⁷⁾ 『新聞総覧』(大正14年)「全国主要新聞社社員名簿」(p.1)に、東京日日新聞社の「整理部副部長(洋行中)」として名がある。『日英新誌』117号(前掲)p.10の日本郵船箱崎丸(8月15日発)による帰朝者一覧に、都留信人と共に名前がある。なお、新妻の妻は、戦後初の衆議院選挙で社会党から立候補して当選し、初の女性代議士の一人となった新妻イト(本名 伊都子 1890-1963)である。

¹¹⁸⁾ *Quelques pages de l'histoire religieuse du Japon*; conférences faites au Collège de France par Masaharu Anesaki (Annales du Musée Guimet. Bibliothèque de vulgarisation. t. 43), Paris : E. Bernard, 1921.

¹¹⁹⁾ 倉田や高須の著作の出版は、留学後のことであるので、日本から取り寄せたものと考えられる。

以下に、今回の調査では特定できなかった人名を一覧で付し、今後の調査研究に委ねたい。

日付	人名	記事
1919/8/26	今井、前田末雄	神戸から乗船した際の見送り客
1919/8/27 ほか	原田	(門司で)「原田来船 買物や小包 郵便などを頼む」
1919/9/23	ひろ子	「ひろ子の夢」
1919/11/4	清水	(ロンドンで)「六時過ぎ清水氏宅に御厄介になる、日本食の御馳走」
1919/10/3	南部	(ポートサイドで)「藤山商會の南部氏と云ふを訪ひてカイロ行の事を相談す」
1920/7/16	三浦	「三浦氏と二日に Cambridge 見物」
1920/7/18	久保田	「Leeds Cathedral 久保田氏と會談、」
1920/12/27 ほか	中村、野瀬	(ロンドンで)「ウエストミンスターのみサの後野瀬氏中村氏宿へ、B.Sq.にて中食 夕三人にてHammersmith より Roehampton へ、野瀬氏のmemorable day B.Sq.で夜食」(1921/1/5)
1924/2/11	立田、松田	「為替 立田、松田一切」
1924/2/16 ほか	河原	手紙の発信先。
1924/3/14 ほか	大森	手紙の発信先。「大森へアルバム」
1924/3/16	高橋?	(ローマで)「午前高橋大佐来訪」
1924/4/20	下住	(ナポリで)「下住氏訪問」
1924/7/21	テリエ叔母	手紙の宛先
1924/11/26	渡辺	「発新年状、両山本、佐乃、岩倉、まさ、母上、渡辺、〇〇」
1925/8/16	長沢	(ロンドンで)「夜長沢氏来訪」
1925/8/14	Naganuma	ロンドンでの土産の買い物リストとみられるものに名前。

推定
公教青年会の知人か。『声』などに今井武、前田末雄などの名前が見られる。
友人、もしくは岩下家の使用人などか。
実在の人物のことなら、岩下にとって近い人の名前であろうか。
『日英新誌』36号1918年11月発行「往来欄」に記載のある日本郵船ロンドン支店副支配人（1918年10月着任）の清水安治か。
「河原（キャソリック・ピリーフ）」「河原氏の祝日」などとあるのでカトリックの友人であろう。
名前の横に？が付されている。
年賀状の宛先。「両山本」は山本信次郎とその弟三郎、「佐乃」はおそらく裾野の岩下家のある「佐野」、「岩倉」は妹花子の嫁先、「まさ」は妹の「雅子」であるので、「渡辺」は母の実家の名なので、実家にも出したか
長沼守敬かもしれない。彫刻家で、岩下清周が三井物産バリ支店長時代から親交があったという。裾野の岩下家の墓所にある清周の胸像を作成している。